

子どもの性格が吃音の進展に影響するといいます。

今まで指導してきたのは、性格的に内向型のタイプの吃音児が多いかなと思います。

どの子も次のようなことができるようになったと思います。

「不安を受け入れることにより、不安を解消していくこと、少なくすることができた。

スムーズに話す方法を教え、スムーズに話せたという経験をつませることができた。

斉読をすることで、音読でみられた吃音の症状を軽減することができた。

否定的な思いに共感し、肯定的な思いに過大すぎるくらい評価することで、以前より明るくふるまうようになってきた。

母親も吃音のことを理解してきた。

そのことにより、吃音の症状は多少改善することができた。」

と。そして、指導している自分も、ことばの教室で何ができるか分かってきたように思います。

「限られた場面、限られた語音にあった吃音の症状は、多少改善していける。

ことばの教室の1対1の指導の場面なら成功体験を積むことはたやすい。

そして、きっと学級という30数名の前でも、なんとか成功体験を積むこともできるだろう。」と

改善がみられ指導を終了していきましたが、不安がなくなったわけではありません。

すこし環境が変われば、体調が変われば、スムーズに話せるだろうか？

吃音が出ても最後まで話すだろうか。

伝えようとするのを途中であきらめてしまうことはないだろうか。

自分で楽に話せる方法を見つけることができるだろうか。

その時、だれか近くにいい相談相手はいるだろうか。

人によってはなんでもないと思えるようなことでも、自分にはどうしようもないくらい失敗に思えることがあります。

失敗体験から、「不安」が目を覚まし、次のときにもその「不安」は「現実化」してしまう。

失敗を繰り返してしまう。

ついには記憶に残っていく。

そうになると、いよいよ「不安」は「恐れ」となり、どうすることもできず、「恐れ」から「逃避」しかできなくなってしまう。

「不安 現実化 恐れ - 現実化 - 逃避」といったマイナス思考の回路がはたらくと、吃音があらわれ、進行していくことも予想できます。

そのときに「逃げなかった - よくやった - 自信 挑む」といったプラス思考の回路がは

たらいてくれることを願います。

句点なら「1」読点なら「1、2」と数唱させます。
慣れてきたら、首を前後に振り、声に出さないで、数唱させます。
それにも慣れたら、利き手の人差し指で、机をうって声に出さないでリズムをうたせま
す。
句読点までが長い場合には、区切り線を入れ、そこでも間を取るように言います。
さらに、漢字の読みがわからず、あせってしまう場合には、読み仮名を書くように言
います。
そして、覚えたら消すように指示します
いっしょに音読し、吃音への不安を取り除きます。
さらに、いっしょに音読していた声を少しずつ小さくしていきます。
それにも慣れたら、もっと小さい声で、ハミングをし、音読をさせます。
1回目の音読を録音し、練習途中の音読を録音し、再生したのを一緒に聞きます。
音読がうまくなっていることを確かめます。
音読の内容が理解できることを評価し、自信を持たせます。
そして更なる練習への意欲付けをしていきます。
次のステップとして、完全読み、暗唱するというプレッシャーを少しずつかけていきま
す。
はじめは短めの段落から取り組んでいきます。
そして少しずつ長い段落に取り組んでいきます。

苦手な場面への対応の仕方を指導します。

「明日、自己紹介するので緊張する」と話す子がいました。

「話さなければいけない」と言う思いと「話せなくなったらどうしよう」と言う思いで不
安なのでしょう。

その子に

みんなの前で話すのは、先生も緊張して夜も眠れないことがあること。

みんなの前で、何を話すかわすれてしまい、マイクを持ったまま立ちすくんだこと。

そんなことがあってからは、できる限りの準備をしておくようにしていること。

を話しました。

「吃音者には過去と未来だけがある。吃音にまつわる不快な記憶と発話への懸

念を捨てさせ、今、この時点で吃音にどう対処すべきか、その方法を吃音児・者に教えないければならない。」

彼ら（今まで指導してきた吃音の子）の吃音の症状の変動性は大きく、自由な会話では吃音の症状はみられず、突然、難発がでてきたりします。

さらに吃音の症状の進行はあまり見られず、吃音の進展段階を評価すれば、軽いものです。

しかし吃音歴が長くなればなるほど、吃音を意識した症状はふえていきます。

話をしていて、突然、難発がでてきて驚きます。

それまでの会話で本人は「できそうな気がする」「でたらいやだな」「どうしよう」と話していることを心配していたと思います。

その思いが現実になることで、不快な記憶として残っていきます。

それによって、マイナス思考の回路がはたらき、吃音の進行に影響するマイナス要因はより深刻化し、吃音の体験は増えていく。

連発、引き伸ばし、難発の症状が現れる頻度はどれくらいだったら吃音というのだろうか。

それらの症状が、100語中10回以上でてきたら吃音というのか、それとも3回以上なのか。

10回と3回では、ぜんぜんちがうように思うが。

3回くらいなら、日常生活の中でたまに経験することもある。

10回以上でるときなのか。

他の同年齢の子どもとくらべて、目立つ場合に吃音というのか。

目立つというのはどれだけ症状がでれば目立つのか。

3回くらいでは目立つとはいえないだろう。

確かに、話をしていて1割以上出れば、どうしても目立ってくるだろう。

それとも本人の自覚があれば、吃音というのか。

2~4歳台にあらわれる幼児吃は成長とともに大半は消えていく。

彼らの非流暢性は正常な範囲だったと言える。

3回なら、非流暢性は正常な範囲にあると言えるだろう。

そしてあるものは、幼児吃が消えないのでこっていく。

幼稚園年長そして小学1年生2年生と過ぎたころに自覚が始まるといいます。

吃音歴が長くなればなるほど、内面的な問題は深刻化するといわれています。>

自覚するまで吃音といわないのなら、吃音が進展してしまう。

適切な指導の時期をのがすことにもなる。

確かに何もしないで消えていく場合もあるが・・・。

なにもできないのか。

話しくさが出てきたら

園での出来事をあれもこれも話したいけれど、うまく表現できないているのかもしれない。

小さく限定して問うようにすると、どうでしょうか。

園で何があったの？

と問うと、子どもは、半日の出来事が頭に浮かんできます。

それをことばで表現するのは、難しいことでしょう。

しかし、

朝は、だれと遊んだの？

何をして遊んだの？

楽しかった？

小さく限定して問うことで、子どもは話しやすいかもしれません。

子どもは発達する力を秘めています。

幼児期には、ことばを学習していきます。

理解できることばをふやし、一語、二語、三語・・・で表現できるようになります。

幼児吃は、その過程の一時期にあらわれます。

大半の子どもはいつの間にか消えていきます。

しかし、いつまでも症状が消えない子がいます。

さらに、その子たちの中にも、話すことの安心感を育てることで吃音の症状を軽減できる場合もあります。

楽に話すことを経験することで吃音を改善できる場合もあります。

一方で、吃音が進展し、話すことへの恐れや緊張があらわれる場合があります。

吃音には、いろんなケースがあります。

その原因、その症状のあらわれ方や進展の仕方など個人差があります。

幼児期の話しくさについて

だれもが通る道だと思ってください。

大体の子が、経験していますよ。

疲れているんだと思い、ゆっくり聞いてあげてください。

会話するときは、話し手と聞き手がいます。
聞き手の思いは、話し手に伝わります。
話し手の思いは、聞き手に伝わります。
お母さんに、話し手の子どもの思いが伝わっているように、子どもにも胸をいためて
おられるお母さんの思いは伝わっていると思います。

あなたの話は、お母さんに伝わっているよとやさしい笑顔でお子さんを見つめてあげて
ください。
いつも聞いているよと笑顔を返してあげてください。

3歳代の子どもは、ことばを学習しています。
しかし、話す器官の発達が未熟なんです。
話そうとするスピードでは動いてはくれません。

わかることばも増えていきます。
しかし、それを使って表現するほどの力も育っていません。
また、自分でできることが増えていきます。
それまでお母さんが「・・・して」というと、その通りしていたのに、「いや」といい始
めます。
それで、子どもにやらせてみると、できないことが多いです。
お母さんの手助けを必要としています。
不安定な時期なんです。
この時期の子どもは、できることが増えていくんですが、できないことがたくさんあり
ます。

幼稚園児が話しにくくなるのは 園の経験をいっぱい話そうとしているんです。
理解したことばを整理し、表現に使おうとしているんです。
いっぱい話すことがあるんだと受けとめて、ゆっくり聞いてあげることだと思います。
初めての集団生活で、まわりの人の影響を受けているのではないのでしょうか？
早く話す子もいれば、ゆっくり話す子もいるんだと思います。
入園までは、大人相手に話していました。
自分のペースで話していても、理解してもらえました。
しかし集団の中には、いろんな子がいます。
その中で生活しているから、社会性を身につけ、ことばを増やしていきます。

もしかしたら、話すスピードの遅い子早い子の影響を受けているのかもしれませんが。
しかし、このマイナスの影響も乗り越えてほしいものですね。
何よりも、お母さんに園のことを聞いてもらえたという経験をつんでいくことで、話すことへの安心感が育ちます。
安心感が育てば、お子さんの話すスピードも一定になっていくと思います。

話すときには、理解していることばをつなげて表現しています。
自分の持っている表現力以上にながい文で話そうとすると、
ことばを捜しているうちに 話しにくさが出てくることがあります。
話すための各器官が協調運動をして、話すことができます。
各器官の協調運動のスピードよりも話そうとするスピードが速い場合にも、
話しにくさが 出てくることがあります。
身近な大人との関係でよかったのが、子どもの成長とともに、
知らない人とも話さないと いけない場面が出てきます。
今までにしたことのないことでも、しないといけないときがでてきます。
そんなときは緊張もするし、疲れもするでしょう。
それをうまくことばで表現できないでいるのではないのでしょうか。
ある子はぐずって表現しているのかもしれませんが。
またある子は機嫌をわるくして、表現しているのかもしれませんが。
またある子は、話しにくくなることで、不安や疲れを表現しているのかもしれませんが。
緊張は、話すための器官に影響を与え、うまく協調運動ができなくさせてしまいます。

スムーズに出てきた「お母さん」と言いにくそうに出てきた「お母さん」とは子どもの
思いが違うのだと、考えられます。
たとえば、スムーズに出てきた「お母さん」にはこんな場面が想像できます。
お母さんと久しぶりに1対1で話せる。
「きょうね、こんなことをしたよ」
「こんなのを見つけたよ」
とつながるのかもしれませんが。
今日の出来事を落ち着いて、ゆっくり話せるのかもしれませんが。
話しにくそうに出てきた「お母さん」には、こんな思いがあるのかもしれませんが。
お母さんは下の子の面倒を見ていて、忙しい。
お姉ちゃんの私がこんなことを話してもいいのかな。
でもお母さんと話したいな。

このことは話しておかないと
と思っているのかもしれませんが。
どちらのときも、子どもの思いを受け止めてあげることって大切ですね。

子どものセルフエスティームを大切に、「よかったね」「がんばったね」と
声をかけて1年を終わってあげてください。

「親と医師、教師が語る ADHD の子育て・医療・教育」から
セルフエスティームとは
Self (自己・自分) - esteem (考える・評価する・尊重する)
「性格・弱点・障害・特技・外見など、自分のすべての要素をもとにつくられる
自己イメージに対して、自分の価値を評価し、自己を大切にしようと思う気持ち」
と述べています。